『熊本県立大学大学院文学研究科論集』 2号. 2009. 9. 30

『真幸先生送別歌巻』翻字と解題

―長瀬真幸と江戸派の人々―

佐方章子

解題

『真幸先生送別歌巻』は、江戸時代後期の肥後熊本の国学者・長瀬真幸が寛政五年（一七九三）から同六年にかけて江戸へ遊学し、約一年の滞在を経て郷里へ戻る際に、江戸において交流のあった江戸派の歌人、村田春海や加藤千蔭らから贈られた送別の歌文を集めたものである。

長瀬真幸は明和二年に生まれ、天保六年に七十一才で没した。通称、七郎平。号、田廬・双松園。熊本藩士。幼児より諸礼故実・漢学等を学び、更に国学研究に努める。寛政五年に伊勢松坂に至り、本居宣長に入門しながら、江戸で村田春海・加藤千蔭・塙保己一らと交流した。萬葉研究に業績があり、多くの門人を擁す。暦法・神道・音楽などにも通じたという。

この『送別歌巻』はもともと弥富破摩雄氏の所蔵であったが、平成二十年に破摩雄氏のご子息にあたる弥富靭彦氏より、熊本県立大学学術情報メディアセンターに寄贈されている。ここには総勢十六名の人物が真幸に対して寄せた文章や和歌

が見える。それについては弥富破摩雄氏の「長瀬真幸と其の送別歌文」（『萬葉集纉攷』大岡山書店、昭和九年）において翻字がなされ、それぞれの人物の解題がある。ただし、この翻字には誤植なども多々見られるため、改めて翻字することとした。解題についても、弥富氏の先行研究を参考にしつつ、新たな情報を書き加えた。

弥富氏は「送別歌巻」について、次のように述べている。なお、旧字体は適宜、新字体に改めた。

巻は縦八寸、長四丈一尺二寸、画紙を附せず、裏面雲母引き、表紙薄茶緞子、地摺れ、絹紙僅かに残る。軸桑、装丁当時のものと覚ぼしい。

巻頭には春海の文章（家集に出づ）。巻軸には、千蔭の長歌二篇（共に家集に出づ）。前者は愛用の金泥縦罫引鳥子紙、後者は雲形漉込み鳥子紙（中略）何れも自筆で、謹厳の中に、典雅、優麗の妙を尽し、更に其の用紙は各自、別々にて、雲形あり、墨流しあり、泥書きあり、罫引あり、或は檀紙、或は奉書紙、藍あり、黄あり、継色紙様のものさへもある。而して此れ等の紙は何れも同寸法であれば、最初より巻子に製して贈つたものらしく、そこにも各人の平凡ならぬ心尽しが十分に認められる。

本巻もと長瀬家の什物であつたが、明治二十五年、筆者が小学生時代に、ふとしたゆかりで、五金を投じて購入したものである。此れなどぞ筆者が、先哲の筆蹟蒐集の最初の一つともいふべきもので、其の表紙の傷み古びも、其の儘に蔵してゐるのは、其の記念を傷つけまいの心からである。箱は家僕に命じて調製せしめ、箱書は高見広川翁が来訪せられた時（明治三十年頃）に、一揮を乞うたものである。

ここにあるように、『送別歌巻』は全長十二メートルに及ぶ巻子本である。それぞれに透き方や模様の違った料紙が使

用されており、弥富氏の言葉を借りれば「典雅、優麗」と評するにふさわしく、美術的にも高い価値があると思われる。このようなものが送られるということは真幸が江戸派の人々から特別な扱いを受けていたことを意味しよう。その交流の実際を明らかにすることが今後の課題となろう。

以下、歌巻に歌文を寄せた十六名の人物についてそれぞれの略歴を記す。本姓で記している人物に関しては、括弧内にその人物の通称を記す。

---

① 平春海（村田春海）

国学者、歌人。江戸の人。延享三年（一七四六）生、文化八年（一八一一）没。六十六歳。本姓、平。一時、阪氏。名、春海。字、士観。通称、伝蔵・大学・昌和・治兵衛・平四郎。号、琴後翁・織錦斎など。村田春道地の次男。兄、春郷。江戸日本橋小舟町の人。父・兄と共に賀茂真淵に入門して、古学を学ぶ。兄の没後、実家の干鰯問屋に戻り家督を相続した。その後豪遊により、家は倒産し、以後国学・歌学に精励して師匠となり、やがて松平定信に召された。門人に小山田与清・清水浜臣らがいる。村田春海の文章は『琴後集』巻十一に見える。

② 飯田豹

漢詩人。寛保二年（一七四二）生、文化六年（一八〇九）没。六十八歳。名、豹。字、公文。通称、半太夫。号、柳橋・芭蕉園。近江彦根藩家老印具家の臣。漢詩文・和歌をよくした。

『送別歌巻』の飯田豹の歌文に弥富氏自筆の付箋あり。

「飯田豹（ハグラ）字公文号柳橋又芭蕉園彦根歌人伝に見ゆ、但し文化六年六十八没は誤。文化八年自筆あれば也。野村東皐に儒を学ぶ。「鴉の海」の中に歌二首見ゆ。」とあり。

③　小林連義兄（小林義兄）

歌人・博物学者。寛保三年（一七四三）生、文政四年（一八二一）没。本姓、藤原。通称、左内・村治。名、義兄。近江彦根の人。彦根藩家老印具家の臣。京都六角堂池坊に客居した。藩主井伊直中の命により、琵琶湖の魚介を調査した。大菅中養父に国学を学び、藤井高尚らと親交があった。

④　源千古

伝未詳。ただし『萬葉集纘攷』に「越智一柳千古かと思ったが、さうではなかった。一柳は源姓ではないこと。書風の全然異なること。又一柳千古は寛政六年には三十五歳の壮者であって、句中の「老が身」とあるに一致せざること。などによって知られる。琴後集巻六に、「篁千古の七十賀」云々と見えてゐるが、恐らく此の人であらうか。」とある。

⑤　ちえ子（多田千枝子）

歌人。寛保三年（一七四三）生、天保五年（一八三四）没。（一説に文政十三年とも）九十二歳。名、千枝子。法号、香習院阿実。築地本願寺内真光院の住職多田賢珠の妻。浄立寺天華冷然の妹。加藤千蔭の門に入り、和歌をよくした。村田春海らと隅田の新梅園に遊んだ折の歌で名をあげた。晩年に出家して、阿実尼と称した。

⑥　縫子（菱田縫子）

寛永三年（一七五〇）生、享和元年（一八〇一）没。五十二歳。初め河合氏。名、縫子。法号、蓮池院妙瑞日清信女。菱田光賢の妻。江戸の人。荷田蒼生子に師事、国学・和歌に長じた。早く寡婦となり、師の跡を継いで歌文を教授した。享和元年、伊勢津藩江戸藩邸にて講義中に没した。加藤千蔭らと交流した。

⑦　沙門宗弼

伝未詳。ただし田中康二氏は「雪岡禅師と江戸派」（『鈴屋学会報』第二四号、平成十九年十二月）において、従来別人であるかのように見える「雪岡」と「宗弼」が同一人物であることを指摘している。

雪岡禅師は春海の文の中では「真乗院雪岡禅師」という名で登場する。真乗院とは京都にある南禅寺の塔頭である。南禅寺には当時、二十五院の塔頭があったが、真乗院もその一つである。禅師が江戸にいる時に居住した金地院も南禅の塔頭であったので、南禅寺派（大覚寺）の僧侶ということになる。そこで南禅寺の僧侶として調査すると、雪岡禅師は寛政六年に西堂位の転位を受けた出世衆であることがわかる。出世衆とは僧位の低い平僧とは異なり、僧録司の推挙によって将軍より住持職の公帖を頂いたものを言う。出世衆のうち西堂位は諸山住持の公帖と十刹（禅興寺）住持職の公帖を与えられた者である。在籍は真乗院であり、道号は雪岡、法諱は宗弼である。雪岡禅師に関して南禅寺の資料から判明することは以上である。

この指摘の後に、長瀬真幸の送別の宴に「雪岡禅師が含まれているということは禅師がこの宴以前からある程度は長瀬

真幸と交流があったことを想像させる。」とあり、禅師の送別文から「千蔭と春海のもとに出入りしていた」こと、「真幸との関係についてはそれほど親密ではない」こと、「禅師の出身が九州地方であった」ことが述べられている。

これに対して近衛典子氏は「雪岡覚え書き―『筆のさが』周辺」（『駒澤国文』第四六号、平成二十一年二月）において、宗弼と雪岡は別人と見なすべきではないかとの見解を示している。宗弼と雪岡が同一人物か否かは残念ながら現在の段階では特定出来ていない。

⑧　良峯経覧

伝未詳。ただし上妻博之氏「長瀬真幸伝」（『日本談義』昭和三十六年五月。熊本文化研究叢書6『肥後の和学者　上妻博之郷土史論集1』〈熊本県立大学日本語日本文学研究科編、平成二十一年三月〉所収）に「『萬葉集佳調』の「出版の事は村田春海、関経覧らに依頼して帰つた」とあるが、この人物のことか。

⑨　雨岡（吉田桃樹）

儒者。元文二年（一七三七）生、享和二年（一八〇二）没。六十六歳。本姓、小橋。名、桃樹。字、甲夫。通称、忠蔵。号、雨岡・雨窓・鰲岐・鰲嶼・時雨園。江戸の人。千蔭・春海の友人。幕府に仕え、浅草に吾妻橋を作るなどした。井上金峨に儒を学び、和歌を能くする。

⑩　物部信説

伝未詳。ただし、『校註国歌大系』十七巻（講談社）の「雲錦翁家集」に「小濱殿に仕ふる水江信説」とある。『福井県

史』によると、明和二年の時点で水江信説は小浜藩の祐筆頭取とある。

⑪　村田泰足

藩士・国学者。寛延二年（一七四九）生、文政六年（一八二三）没。七十五歳。名、泰足（安足）。通称、新太郎・新次郎・大輔（大介・大助）。号、凝烟舎。近江彦根藩士。明和六年（一七六九）祖父武兵衛の跡をつぎ、旗宰領となり、のち作事門改役・作事方元締改評判役などを歴任した。初め大菅中養父に学び、寛政十一年（一七九九）本居宣長に入門。同年、藩校稽古館創設に当り、和学教授となる。

⑫　源躬弦（安田躬弦）

医者・国学者。宝暦十三年（一七六三）生、文化十三年（一八一六）没。五十四歳。一説、宝暦八年生、五十九歳没。名、若中・躬弦。通称、快庵・一庵。号、棗本。越前福井藩医安田征盛の男。福井藩医。寛政八年（一七九六）家督をつぎ奥医師、藩主松平治好室定姫付、次いでその女広姫付となった。賀茂季鷹門。加藤千蔭・村田春海と親交があった。

⑬　源道別（信夫顕祖）

漢学者・国学者。明和三年（一七六六）生、天保三年（一八三二）没。六十七歳。本姓、源。名、顕祖。幼名、道別。字、順卿。通称、真五郎。号、槐軒・寿山。法号、長台院寿山量昌居士。江戸の人。大炊御門経久に学んで書に優れ、徳川一橋家に仕えた。

⑭　藤原朝臣徳之（村山素行）

歌人。明和九年（一七七二）生、天保六年（一八三五）没。六十四歳（一説、六十三歳）。本姓、藤原。名、徳之。号、素行・宝所・宝所庵・寿庵・薫行。法号、宝処庵素行日総禅定門。徳川一橋家家臣村山有成の男。母、旗本長谷部氏の女。江戸の人。天明七年（一七八七）一橋家の近習となり、のち小姓となる。寛政十年（一七九八）剃髪、素行と称す。加藤千蔭・岡田真澄・木村定良に学ぶ。

⑮　喜代良（長野清良）

国学者。生没年未詳。江戸時代後期の人。本姓、源。名、清良。通称、靭負。賀茂真淵・田安宗武の門人。『萬葉集』に造詣が深かった。

『萬葉集讃攷』の長瀬真幸について書かれた文章の中に「江戸にては長野清良、菅沼刑部左衛門によりて武家故実を修め、猶此の清良、並に月照院には舞楽を習ひ」とある。

また河野頼人「狛諸成の万葉考増訂を助けた人々」（『万葉学研究・近世』桜楓社、昭和四十四年）に次のようにある。

清良は田安藩士。真淵門の学者として万葉集の普及発展につとめている。その主な業績をあげると、京都の邑井敬義が安永九年謄写校合した邑井本古葉略類聚鈔を清良が写し、それを借りて千蔭が寛政六年に写し、「万葉集略解」にも此書に言及している（佐佐木信綱博士「古葉略類聚鈔」三一七頁、『万葉集の研究・第二』所収）。また、文化七年、師の真淵説によって万葉集の本文を書き改め、巻の順序をもかえた「定本万葉集」を編纂した（「万葉集研究史」五一八～九頁、『校本万葉集一』所載）ことなどである。（猶、「琴後集」をみると、真淵の苦心になる考六巻の刊行

につとめ、真淵没後五十余年の文政七年にはじめて世に揃っておくった熊本の長瀬真幸にも、先達として交わっている。）

⑯橘千蔭（加藤千蔭）

国学者・歌人。江戸の人。享保二十年（一七三五）生、文化五年（一八〇八）没。七十四歳。本姓、橘。名、佐芳・千蔭。字、徳与麿・常世麿。通称、常太郎・要人・又左衛門。号、茶園・芳宜園・耳梨山人・逸楽窩・江翁・仁斎・橘八衢・優婆塞竺愷。加藤枝直の男。能因の後裔に当るという。父枝直の江戸町奉行与力の職を継ぎ、天明八年（一七八八）致仕するまで公職にあった。幼時は父に、少年時からは賀茂真淵に学び、同門の村田春海と共に江戸派の双璧をなす。門人に一柳千古・清原雄風・木村定良・岡田真澄ら。絵を建部綾足に、書を滝本松花堂に学び、書は千蔭流と謳われた。加藤千蔭の歌文は『うけらが花』の巻七に見える。

『真幸先生送別歌巻』翻字

〈凡例〉

・翻字をするにあたって本文の漢字が旧字体のものは適宜、新字体に改めた。
・読み易さを考慮し、私に濁点、句読点を付した。
・前述した人物の番号と対応するよう、歌文の冒頭に番号を付した。

①　長背ぬしが肥の道のしり、熊本の城にかへるをおくる詞

かけまくもかしこき、二荒の山にしづもります大神の、むかしあらぶりし世を治め、まつろはぬ人を、ことむけたまひける時、百の軍の君たちが御軍にいそしく、あかき心をもて、おほやけにつかへまつりけるを、めでよろこばしたまひて、其君たちのために、郡をわかち、郷をあはせて、ことさらに、くにところをさだめてなん、そをよざしたまひにける。さるは雲かゝる山も、礪のごとくたひらにふみなし、とほしろき河も、帯の如くほそらに、あせなむ世までも、永く其所をしれとて、天の下に、二百まりの君たちをなん、たてたまひにける。はたその君たちはや、外にはあたまもる城をつらね、うちには八十のつかさをまけて国つ神をあがまへ青人くさをいつくしみて、天皇のしきますくにのとほつまもりの、御垣になむありけらし。それ上つ代の、国造、県主てふは御世つぎのふみらに、其事のくはしきよしを、もらして、今考へいふべくもあらねば、なずらへがたし。又かの中つ世の、くにつかさの、位ひくゝ、品かろきかたらひは、なか〳〵に、ならべいふべきわざならねば、まねびいづべくも、あらざりけり。此君たちの、かく品たかくおはすめるがなかにも、その上の品なるをば、くにのぬしと名づけて、世のおぼえいよゝかしこく、物のいきほひことにしもぞありける。そも〳〵、肥の道のしり、熊本の君はしも、かの国の主の、貴き品におはしまして、世々にかしこき君たちつぎしらして、聖の道、たふとみたまふあまりに、文屋のつかさをおこし、物学びの博士をたてゝ、国人をなん、みちびきたまひにける。されば物しり人おほくつどひ、名だたるふびとゞも、あまたいで来て、はやく天の下にも聞え、かつは後の世までも、いひつぐべくなむ、あることは、むかし春海がわらはなりし時、その博士なりける、秋山の翁にあひて、其くはしきよしをぞ聞ける。こゝに高本の大人は今のふんやの博士なるが、五ともの書をとりて、諸人を、をしふるいとまに、皇御国の、いにしへのふみをも考へ、また県居の翁が、しるせるふみらをもよみて、ひそかに、こをしのびつゝ、かく文屋のこと、よゝにおこ

したまひつれど、このみくにの学の事、そなはらぬは、いとあかぬわざなり。いかで大和だましひならむ人をとて、こを其君にもまをし、またあだし、つかさの人にもはかりて、八十とものをの中に、ひとり長背の家の子を、えらみいでゝ、このことをしもぞ、おほせたる。さるは長背のぬしが、みくにの学に、くまなく、古の心にゆきとほれることは、はたことゝいふべくもあらぬを、そのまめなる心より、なほたらはずやおもひけん、さらに県居の翁がをしへを広くとひさけ、くはしくきゝあきらめばやとて、神風の伊勢の国にいたりては、本居の宣長に名づきをおくり、鳥の啼、東の、とほのみかどにしては、源の清良、橘の千蔭になむ、ことゝひける。おのれはた、をぢなきものから、むかしあがたぬの、庭をふみならせし人の、つらなればとて、今をかたらひ、いにしへをしのびて、うらなく、むつばひつるを、今年弥生のなかば、そのくににかへりゆきなんとす。かくて別をしむ人々、うたげのむしろをつらね、うまのはなむけをなむ、すなるに、盃をとりて、春海がことだてすらくは、ぬしはや、今かへりゆきなば、かしこき、大和だましひをもて、そのくに人をみちびき、やがて上つ代の、学の道も、今より其くにゝ、おこりぬべくなんあるは、此ぬしのときにあひ、こゝろざしをうるのみかは、高本の大人がいさをもこのぬしによりてあらはれ、まして其君の、学の道、たふとみたまふ御心には、いよゝさかしと、めでよろこび、たまはざらんや。さらばおのがどちの、わたくしのわかれは、ことにもあらずと、ゑひなきしつゝいへば、ありとある人々、このことを聞て、いでや、けふのわかれのむしろは、ことのかたりごとにもせむとて、おの〳〵ゑひにのりてぞうたふその歌

年月を、千里のよそに、へだつとも、ふることしのぶ、友なわすれそ

平春海

②　江戸にて長瀬真幸ぬしに、かりそめながら、逢たりけるが、ほどなく肥の国に、帰ると聞えければ、人々歌よみて、おくりける序に、おのれも別れ奉るとて、

一目見し、我にてしらぬ、皆人はこゝろづくしの、別れをやせん

人なみの、別れのみかは、たびごろも、なれぬうらみを、吾ぞかさぬる

飯田豹　上

③　長瀬真幸主が、肥の道のしりに帰る時、同じく江戸にありて、よみておくるうた、二首、

君がゆく、日の道のしり、しらぬ故、もとなおもほゆ、わたる海べも、越む山路も

わがすめる、近江の国の、あふことの、又まれなるを、今いかにせむ、後いかにせむ

小林連義兄

④　長瀬ぬしの、肥の道のしりへ、かへり給ふを、おくる長歌短歌

しらぬひの、つくしなるてふ、肥のくにの、道のしりはも、あかねさす、日の入かたの、大うみの、千里のをちと、きゝつるを、いま別ては、いつかまた、あひかたらはん、老のみは、人にことなる、思ひにて、わすられぬかも、しかはあれど、古郷にしも、たらちねの、母のみことに、若草の、つまもいませば、けふ〳〵と、君を待つゝ、おはすらん、手向けよくして、かしこかる、海やまこえて、つゝみなく、帰りまさなん、丈夫の友

名に高き　あそ山ざくら　かざす日はあづまのそらを　かへりみはせよ

源千古

⑤鳥がなく、東にすゑし、關の名の、霞とゝもに、夜をこめて、立別つゝ、さほ姫の、おるてふ花の、から錦、かさねきつゝも、玉ぼこの、ちぶりの神に、散花を、ぬさにとりそへ、手むけして、かしこき山も、みをはやく、ながるゝ川も、やすらけく、つゝみなくして、玉くしげ、ふた年かけし、ふるさとの、家路にかへる、旅路こそ、うれしかるらめ、しかはあれど、今よりをちの、長き日を、柳の糸の、より〳〵に、歌しのびすと、諸人の、まとゐする日は、たれもみな、しき忍ばまし、しきなみの、またもよせてよ、あしきたの、野坂のうらの、おきつしら浪

かた〴〵に、道こそかはれ、帰てふ、なごりはおなじ、春の雁がね

咲花を、あそのやしろに、たむけつゝ、ふるさと人や、君を待らむ

ちえ子

⑥

縫子

あまのごと、思ひすてゝも、ことゝはゞ、人やとがめむ、世中は、たはぶれにくき、たはれ島、浪のぬれ衣、きるとても、いかゞはすべき、ならの葉の、名におふ宮の、古言も、かたりあはせし、友垣の、へだてぬ中も、隔なば、せんすべしらじ、しらぬひの、心づくしの、別路は、われのみならず、月花の、まとゐになれし、人々の、神も泪

の、浦ならめ、さすがにけふは、ますらをも、思へる君も、たわらはの、心ちやせまし、しかはあれど、ふるさとにしも、玉くしげ、二年あはぬ、たらちねや、待おはすらん、若草の、妻やこふらむ、きゞす鳴、野べの霞と、諸ともに、はや立かへれ、玉ほこの、道の長手の、桜花、袂にしめよ、ことさやぐ、もろこし人の、きよそへる、錦の神に、たち増る、やまと言の葉、つゝみもて、帰いぬとも、鳥が鳴、東の方を、折々は、思ひ出つゝ、する墨の、硯の川の、水ぐきの、あとだにたえず、おちたぎつ、つゞみの瀧の、おとづれはせよ

もゝ重山、千里の波路は、へだつとも、心へだつな、あはむ日までは、

よそにこそ、心づくしの、別なれ、人はこゝろの、ゆく旅路かも

⑦もはら、まねびてさへ、いとかたき道と、きゝつれど、わが国ぶりを、つゆしらぬも、くちをしければ、すだらのをしへを、おこなひのいとま、ふたりの大人のもとへ、をり〳〵まうではべるちなみに、これかれのきみたちに、うらやすく、むつびなれぬるを、よろこび、はべりつるが、ながせぬしの、ふるさとへ、帰給ふときゝて、うまのはなむけせまくおもふに、うき世のほかにすみぞめの、袖にはつゝめる、たからもなければ、ことばをおくるふるきためしに、ならはむとするに、そのこと葉てふは、をしへとも、いましめとも、なるべきをこそいふべければ、また草木、とりけものゝ名さへ、えわきまへぬものゝ、わざならんやは。されど何ごともなく、わかれをつげはべらむも、ほいならねば、おもひいづるまに〳〵、かきつけはべりぬ。なめげなりとな、おぼしそ。そも〳〵、おのれは、むつびそめてより、ほどもなきものからなごりをしけれど、をのこうまれて、くはの弓よもぎの矢をとり、よもにむかひているは、ひとつさかひに、とゞこほらず、こゝかしこ、みちしれる人など、とぶらひて、ますらを

の、こゝろざしを、はたさむためならし。鳥けものなどのむれゐるがごとなるを、あへてたとふべきにはあらじ。ことにぬしは、きみにつかへまつる身なれば、ゆくもとゞまるも、君のまけのまゝ、ならんとしれば、わたくしのわかれにもあらず、はたいにしへぶりを、したふひと〳〵はかたみに心だにかよへば、千さとをへだてゝも、そのみやびはおなじとこそ、きこゆれと、しひて、ものゝことわりに、おふせはべりぬ。さて五十あまりのうまやぢを、ゆきのまに〳〵、みたまはむに、おなじ色香にこそ、はなはさくらめと、

立わかれ、ゆかむ野山に、咲出る、ことばのはなも、千種成覧

うみにくがに、いと、とほくへだゝりしくになれば、かへりつき給ひなんころは、ふるさとの花は、あともなきまで、みどりのみ、おひしげりなんとおもへば、

道すがら、つもれるきみが、ことのはを、帰て宿の、梢にやみむ

おのれが、うまれしさとも、おなじつくしの道なればともなひて、ゆかまくほりすれど、心にもまかせねば、

かへるさに、ことやつてまし、思出の、なき故郷も、さすが恋しき

こゝに、まかりたまひて、としつきも、かさなりはべれば家人は、さこそまちわび給ふらめと、おしはかりて、

ふるさとに、月日や永く、おもほえん、こゝにはけふの、別をしめど

沙門宗弼

⑧あすはあふみと、いひけんは、まぢかきほどのわかれにて、露けき袖も、ひるまあるわざならむを、になくおもひかはせしぬしの、おもふも、とほき故郷へ、うつろひたまふらむは、わきて心をぬさと、くだくべきをりならずや

さるはいたづらに、すぎにし月日のみ、とりかへさまほしう、霞と丶もに、立わかれなむ後は、なにのこ丶ちかせむ。しかはあれど、うから、やからの君たちの、まちよろこぼひたまふらむは、はたさることにて、白川の水の、よどむことなく、かへりいたり給ひて、野さかのうらの、うらなく、あひむつび給ひなむものぞと、いまは、たゞひきもの神をのみ、かけていのるになむ

諸ともに、花にもあかで、わかれなば、ながき春日を、いかにくらさむ

良峯経覧

⑨

雨岡

おほよそ、あめつちの、みたまのふゆに、なりいづるもの丶、をさなる人と、うまれきぬるだにあなるを、ましてますらをとさへ、なりにたるは、さちのうちのさちになもありける。つかさくらゐたかくて、しもをまつろへ、ひきゐ給ふうま人たちのうへは、うかゞひしるべくもあらず。たなひぢに、みなわかきたり、むかも丶にひぢりこ、かきよせ、田つくり、くさきり、くがゆくには、荷のをゆひかため、舟のへいたるには、かぢさをほさで、きのふのまけ、けふのいとなみに、いへわすれ、身もたなしらず、あかしくらすあたりの、こともさておきつ。かくゆたけきおほむ時に、あひまつり、その君の、めぐみによりて、その身はさらにもいはず、かぞいろは、めこはらからまでたらはぬことなきがあまり、おのがじ丶、このめるすぢに、心よせまくほりするも、つかふるにいとまなく、あるはその君の、しり給ふくぬちならでは、たちもいでがたく、千里行、こまのほだしに、か丶れるなして、おのが身をしも、身としなし得ぬは、こも又ますらをの、まご丶ろの、おもむけを得たりとも、いひがたかるべし。い

かにしてか、そのこのめるすぢを、おのがまに〳〵、なし得てんや。こはいとも〳〵、かたしとも、かたきことに、なもありける。長背ぬしの、とほつおやは、天つたふ、日の入国の、人なりしを、日のいづる国のみいきほひを、しぬび、しらぬひ、つくしのくになる、ひのみちのしりにまうけりし由こなたくまもとの城を、しめたまふ君に、したがひまつれりとか。かの君のとほつみおやは、四方の海、なみ風あらび野べのとぶ火、たゝぬひまなく、物部の八十のたけを、かたみにきしろひあらそふ世に、ことしあれば、あらみたまを、ふりおこしあたをはらひ、のどなる時はいその上、ふりにしよの、ふみらよみあきらめ、たへなるうたども、つくりいでゝ和みたまをなぐさめ給ひ、いたやぐし大空にとびかひ、小角つゞみのこゑ、山たにゝ、とよめりしをりしも、かけもくも、かしこき、おほ御つかひして、よにひめことゝすなる、つたへのをち〳〵を、聞えあげさせ給ひしとふことはいにしへいま、たかきいやしき、かたりつぎ、いひつぎつゝ、いちしろし。つぎ〳〵の君たちも、遠つみおやの、みこゝろしらひ、うけつぎ給ひ、いまも、すめら御国の、ふみをはじめ、ことさやぐ、からぶみをも、このみたまひ、もゝ千々のをみたちに、まなばしめたまふが中に此ぬしはやまとだましひ、かしこく、あを雲の、あがれるよのふみら、かうがへわかち、うたもふみも、その世の手ぶりにして、しらべいとたかし。かれその君のおほせごと、うけまつり、いよゝ、こと葉の林に分入、ます〳〵、ふみの道を、ふみひらき、おくともおくかを、とめむとて、さきつとし、鳥がなく、あづまの、とほのみかどに来たり、ひろくまじはり、ねもころに、とひはかり給ひつ。これや、天つちのみたまのふゆによりて、好めるすぢを、心のまに〳〵、なし得といふべし。こゝの橘の園、村田の家などに、へだてなく、行かひ給ひしかば、おのれもことゝひかはし、むぐらふの、けがしき庭の露をも、うちはらひ給ひしを、ことし弥生中、はゞかり、まけをへて、もとつ国に、かへらひ給ふなる、うまのはなむけする、むしろにつらなりて、盃くみかはし、またさらに、まで来給ひなむことを、ちぎりてうたへらく

松浦舟、こぎかへるとも、つなでなば、とく来まされむ、ますらをの友

⑩長瀬ぬし、石上ふりぬるふみに、心とゞめて、しらぬ火の、つくしより、こゝの大江門に、いたり給ひ、去年よりしも、よみ歌のつどひにして、あまたゝび、かたらひかはし、難波のうらなく、むつばひつゝ、はやくあひしれりけるにも、まさりて、したしくものし侍りしを、此春なん、霞とゝもに、立帰り給ふときこゆなる、風のおとの遠からず、またもきまさむとは、契かはすものから、雁がねの、雲井はるけき心地に、唐衣、かへす〳〵も、別れをしかるをば如何はせむ。人とゝもに、うまのはなむけすとてよめる。

わたのはら、霞をわけて、行舟の、浪路やすらに、こぎ帰りませ

おいらくの、心ぼそさも、君により、千世をかけつゝ、いはひてまたむ

物部信説

⑪　江戸に在て長瀬ぬしが、日の道のしりへ、帰らす別に、よみてまつる

むさしのみ、ありその崎に、浪のむた、来よる玉藻の、めづらしく、君とよりあひ、うるはしき言問すれば、さぬ葛、くるしきたびも如是てこそ、ありうるものと、なぐさめて、わがをる時に、たづねても行年よしなき、白縫の、遠き筑志に、帰り行、ときに成ぬと、ねもころに、語るをきけば、別まく、あまたをしけど、とゞむべき、すべのしらねば、益たかに、こゆらむ山の、高くに、偲てをらむ、葦北の、浦のしら浪、かへりても、こゝろはよせよ、

宮び雄わがせ、延葛の、わかれいゆかば、何時かまた、けふをしのびて、君と語らむ

村田泰足

⑫　長背ぬしが故郷へかへるを送る文

天地の、なしのまに〳〵、なり出る、くさ〳〵おほかる中に、うつせみの、人となれるは、いみじきさちになん。其人なる中に、をのこにしも、うまれぬるは、さちが中のさちにぞ有ける。さてしも、をのこの、たけく雄々しき心おきてには、何をかも、たとへんときは、かきはに、うごきなき、高山をもて、たとへつべし。山はしも、何れの山をか、たとへむ。たかくかしこき、不二の嶺をもて、たとへつべし。万の道に、行至るさえには、何をかもたとへん。しほなわの、たゝへたる、大海をもて、たとへつべし。海はしも、いづれのうみをか、たとへん。そこひなく限なき、筑紫の海をもて、たとへつべし。こゝに火の道のしりの、君につかへまつれる、長背ぬしは、かのたか山の、うごきなき、心おきてをゝしく、大海の、しほのみちたゝへたる才も、いみじく、諸越の、まなびはさら也。大御国の、いにしへぶみの道もいたりふかくなんあるを、猶八十くまおちず、とひあきらめよと、かの国の君の、よさし給ふまに〳〵、いにしとしより、この国にまで来ぬ。そのすぢの友垣の、あした、ゆふべのまじらひにも、此ぬしなくしては、事たらひぬべくもおぼえずなん有ける。さるを今しも、もとつ国に帰んと告る事あり。かのつくしの海に、たぐへる才の、日にけに、まさりゆかん名は、千さとの波を、へだつとも、かくれあるまじかれど、たけくをゝしき、心おきてをば、たゞ朝夕にむかふ高根を見さけて、おもひ出なんことの、すゞろに、うれたければ、其わかれのむしろに、いさゝかおもひを、のぶるうた、

ふりにける、道をしとめば、かつわかれ、かつゆきかよへ、益良雄の友

源躬弦

⑬　長背ぬしが、ふるさと、肥の道のしりへ、帰るを送る、ながうた、みじか歌

源道別

蘆原の水穂の国と、おはしつる、国の名しるく、としのはの、おきつみとしも、いかしほの、としまのさとの、あがたゐの、おち穂ひろふと、あからびて、日はしみらに、ぬばたまの、よるはすがらに、いさをしく、ありける物を、未玉の、としたちかへり、春もやゝ、ゆだねまくべき、時来ぬと、おもふあひだに、みよしのゝ、かりがさそへる。あしきたの野坂のうらの、呼児鳥、よひかとよむるひたぶるに、故郷こひて、くさまくら、いほへ山、ちへやまこえて、海童の、神がてわたりしらぬひの、筑紫の国に、たひらけく、かへりまさなむ。かくて君、たちはなるとも、秋ごとにまたもとひきて、こゝだくの、落穂ひろはせ、われもひろはむ

反歌

花にだに、心とめねば、鶯の、しばしとだにも、なきあへぬかも、春霞、野にも山にも、おほはなむ、道なしとてや、君とまるべく

⑭　長背ぬしが、肥の路のしりへ、帰らむをおくる長歌短歌

しらぬひの、つくしなるとふ、肥の国の、道のしりなる、熊本の、城の辺に住て、つがの木の、いやつぎ〳〵に、家の名を、つげる我背は、かしこきや、吾国ぶりの、歌しぬび、文学むと、うちかざす、都にのほり、鳥が鳴、東にいたり、武士の、八十とものをの、つどふなる、豊島を国に、日をかさね、月をへにつゝ、石の上、ふりにし書の、おくかをも、あきらめぬれば、言魂の、さちはふ国に、あれきつる、かひはありけり、限ありて、古郷にしも、今更に、帰りますとも、歌しぬび、書見るごとに、しばしくも、なれにし友な、わすれそよ君

反歌

古郷へ、かへり行とも、玉くしげ、ふたゝび来ませ、丈夫の伴、むつびせし、ことわすれめや、日をかぞへ、月をよみつゝ、まちつゝあらむ

藤原朝臣徳之

⑮ 長背の真幸のぬしが、筑紫にかへらるゝに、幣ぶくろ送るとて

喜代良

鳥が啼、東の国ゆ、しらぬ火の、筑紫のくにを、住所とて、かへり行ける、丈夫の、乗その駒、あしびきの、山路なづまず、踏さくみ、のる其ふね、いさなとり、海路を平らに、水をひきて、至らむものぞ、吾国は、千よろづ神の、あもりまし、さちはふからに、やまづみの、神にぬかつき、わたつみの、かみををがまひ、ぬさまつり、やすけくいませ旅の長路を、海山の、神のちからに、平らけく、やすけくいませ、旅のなが路を

⑯　長背ぬしが、肥の道のしりへ、帰るうまのはなむけに、よみ侍る長歌二首、短歌二首

天地の、初めの時ゆ、ちはやぶる、神の御面と、たたへこし、肥の国はしも、神からか、国栄ゆとふ、国がらか、人ぞさはなる、そが中に、はしき吾兄は、かしこきや、皇御国の、上つ代の、書まなびすと、其君の、きこし給て、いやひろに、ましたらはせと、ねもごろに、よさしたまへれ、葦北の、野坂の浦ゆ、押照や、難波のみ津に、直渡、天伝ふ日の、経緯に、い行めぐらひ、まつぶさに、問明らめて、天の下、集ひまつれる、大江門に、まゐり来まして、玉鉾の、道行ぶりに、おもはずも、吾ふせ菴のまげいほを、とひませしより、魂あへば、あひぬるものと、朝よひに、馴にしものを、今更に、帰いなむと聞しなべ、心ぞ痛き、しかはあれど、故郷にしも、家人の、斎瓶すゑて、天地の、神にこひのみ、またすらむ、事をし思へば、とゞむべき、たびならなくに、つゝみなく、帰りいまさね、阿蘇山に、うしはきいます、大神も、まもらひ給ひ、しらぬ火の、筑紫の国の、国もせに、かぐはしき名を、立む公はも

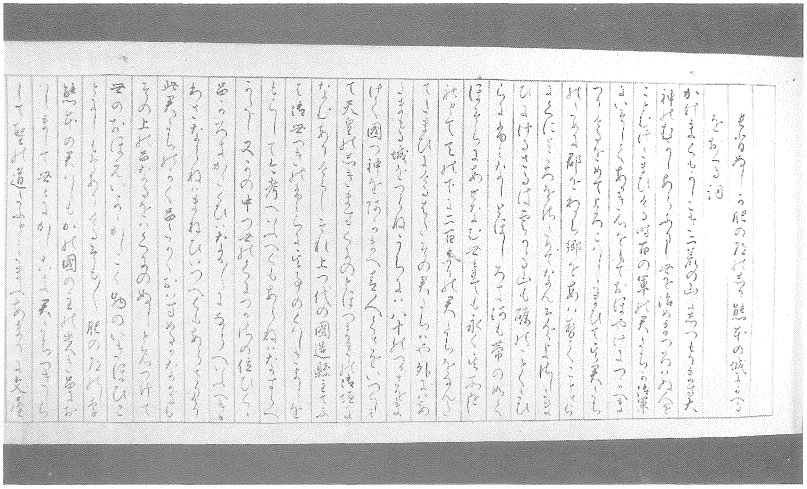
反歌

別とも、何か歎かむ、公が名は、千里の遠に、薫ざらめや、吾はもよ、入江の渚鳥、公はもよ、雲ゐ行たづ、春霞、翅に分て、足曳の、高嶺の花に、うち羽ぶき、行らむ日すら、おくれゐて、うらなけをらむ、千里行、翅にしあれば、明日のごと、天つ雲路を、飛かけり、またも来まさね、待つゝをらむ

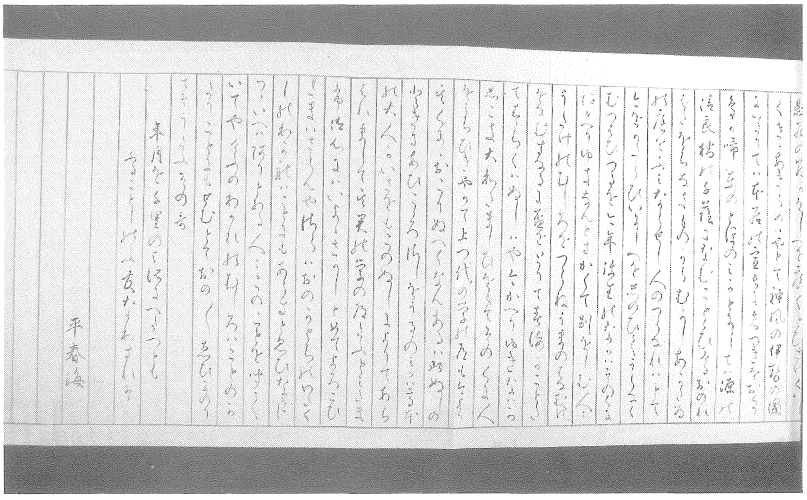
反歌

高く飛、翅にしあらば、桜さく、荒山中も、おひしかましを

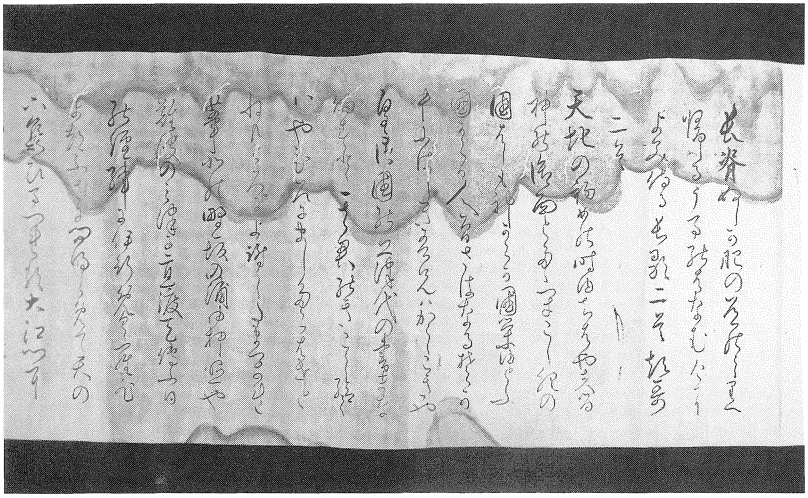
橘千蔭



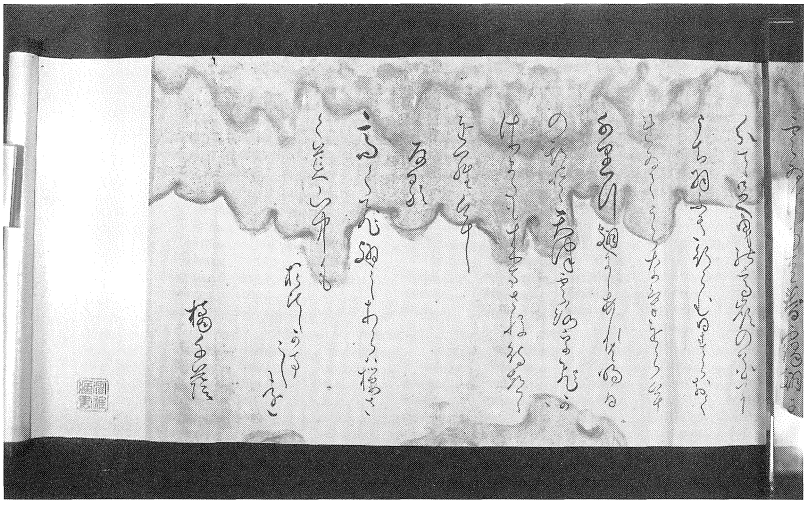
春海歌文　冒頭



春海歌文　末尾



千蔭歌文　冒頭



千蔭歌文　末尾